

## 「広い宇宙に地球人しか見当たらない150の理由：

### フェルミのパラドクス」

スティーヴン・ウェブ(著)

松浦俊輔(訳)

青土社 2004年7月8日刊

コペルニクスが地球は宇宙の中の平凡な銀河の、平凡な星をめぐる、平凡な惑星であるという、いわゆる平凡原理を打ち立てて以来、地球が宇宙の中心であるという人類の宇宙観は革命的に変化した。現代人の多くは地球外生命が存在していても何ら不思議はないと考えている。それにもかかわらず、我々は地球外生命が存在するという確固たる証拠を持っていない。

それを受けて、1950年にはイタリア人物理学者エンリコ・フェルミが「宇宙の誕生以来、地球のように生命体を維持できる惑星は無数にあるはずであり、そこに地球人を超えるような高等生命が存在しても不思議はないのに、彼らが地球に来たり、メッセージを送ってきたという証拠が見当たらないのはなぜなのか」というパラドックスを提起している。

本書は、このパラドックスに対して、自然科学、社会科学、言語学、哲学などから提示されてきた諸説を49個集め、「実は来ている」「存在するがまだ連絡がない」「存在しない」の3つに分類し、手際よく解説した上で、50番目に著者自身の判断を紹介したものである。やたら喧しい昨今の社会情勢から離れて、秋の夜長にこの深遠なパラドックスに思いを巡らせるのはいかがだろうか。

「存在しない」説をとる著者は、地球人が特別であるという立場をとるのではなく、太陽系の平凡な惑星である地球に偶然がかさなって進化してきた生命の存在そのものは、やはり奇跡的なことであり、その幸運を人類は祝福すべきであり、この大きな宇宙の中で我々に与えられた幸運をちっぽけなエゴや敵愾心で破壊してしまうのは、いかにも惜しいと主張している。その上で、「自己意識を持った唯一の動物、愛とユーモアと思いやりの行為で宇宙を明るくできる唯一の種が、ばかげたふるまいで自ら消えようとしているのかもしれない」と警告している。

「存在する」派の人は多いと思うが、その議論をより深く知りたい方はポール・デイヴィスの『宇宙に隣人はいるのか』(草思社)をお読みになることをお勧めする。